

メッセージアウトライン 創世記32:1～21「ヤコブの祈り」

ラバンと別れてヤコブの一行は故郷カナンへと旅を続けて行った。ラバンのもとでの長い間の苦闘から解放されると、今度はその苦闘をしなければならなくなった原因である兄エサウを欺いた問題に直面せざるを得なくなった。神の約束されたカナンへ本当の意味で帰るためには、この根本問題を解決しなければならないのである。

私たち信仰者の歩みも実はそういうところがあるのではないか。家族や友人、傷つけてしまった人との和解、仲直り、赦しを請うこと、冷えてしまった関係の回復、……。神はこれらのことにやがて私たちを直面させ、真の信仰者としての前進、成熟のための一歩を促されるのではないだろうか。相手がエサウのような粗野で肉的な人物であったとしても、だましたり見下げたりしてもよいということはない。

私たちは悪ではなく、善を行う者とならなければならない。→詩篇15篇、34:14、37:3、27、Iテサロニケ5:15、へブル13:16、Iペテロ2:11～15、20、3:11、13

[1]「さて、ヤコブが旅を続けていると、神の使いたちが彼に現れた」

ヤコブはかつて故郷のカナンの地から叔父ラバンのもとに逃げていく途中、夢の中で神の使いたちを見た。→創世記28:11～12 そこで主は彼と祝福の契約を結ばれ、「…あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない」(28:13～15)と約束された。そしてこの故郷のカナンへの帰り道でも、また神の使いたちが彼に現れたのである。(それが夢の中で会ったのか、実際に見たのかはわからない)

[2]「ヤコブは彼らを見たとき、『ここは神の陣営だ』と言って、その場所の名をマハナイムと呼んだ」

「陣営」マハネ、「神の陣営」マハネエロヒーム、「マハナイム」二つの陣営、一対の陣営の意味

マハナイムはマハネの双数 これはヤコブの安全を守るための神の軍勢としての御使たちの現われであると考えられる。ヤコブは神の約束を思い起こし、大いに励まされたことであろう。

[3]「ヤコブは、セイルの地、エドムの野にいる兄のエサウに、前もって使いを送った」

ヤコブが父の家へ帰るためには兄のエサウとの和解がどうしても必要であった。これは避けて通ることができない。それで彼は前もって使者を送ったのである。「セイルの地、エドムの野」死海の南東に広がる地。

[4-5] ヤコブが使者を送ったのはエサウの様子を知るためと、自分がラバンのもとから帰って来て、まずエサウの好意を得ようとしていることを伝えるためであった。彼は自分のことを「しもべ」、エサウのことを「主人」「あなた様」と呼んでへりくだっている。これは口だけでなく真剣な思いを込めて言ったのであろう。ヤコブは真実にエサウとの

和解を求めている。

[6] 使者はエサウからの何のことばも持ち帰らなかったが、ヤコブに会うために四百人の者と一緒に来ることを伝えた。たぶんエサウはヤコブがまた何か自分をだますのではないかと警戒心を持って、実際に自分で行って会ってみようと思ったのであろう。ヤコブはたくさんの家畜やしもべたちを持っていたが、エサウもこの二十年の間にたくさんのもべを持つようになっていた。

[7-8] 「ヤコブは非常に恐れ、不安になった。それで彼は、一緒にいる人々や、羊や牛やらくだを二つの宿営に分けた。『たとえエサウが一つの宿営にやって来て、それを打つても、もう一つの宿営は逃れられるだろう』と考えたのである」

策略家のヤコブらしい対応策である。彼はまだエサウから和解と赦しを得る確信がなく、恐れと不安に満たされた。それで自分の知恵を駆使して何とかエサウの好意を得ようとしてこのような方法を取り、さらに、もしもの時には半分の宿営は逃れられるようにと計画したのであった。

[9] 「ヤコブは言った。「私の父アブラハムの神、私の父イサクの神よ。私に『あなたの地、あなたの生まれた地に帰れ。わたしはあなたを幸せにする』と言われた主よ」

ここでヤコブは祈る。彼の祈るお方は祖父アブラハム、父イサクと契約を結ばれ、守り、導き、祝福して下さった主なる神である。そしてこの主ご自身がヤコブに彼の生まれた地に帰れと言われ、彼をしあわせにすると約束して下さったのであった。(31:3)

ヤコブはその約束を持ち出して主に願って行く。ここには、どうかその約束に従って私を守り、導いてくださいとの思いが込められている。

[10] 「私は、あなたがこのしもべに与えて下さった、すべての恵みとまことを受けるに値しない者です。私は一本の杖しか持たないで、このヨルダン川を渡りましたが、今は、二つの宿営を持つまでになりました」

自分の知恵を働かせることを依然として優先するヤコブであるが、ここには神への信頼、神の前における自己認識ということにおいて大きな進歩が見られる。彼はここで自分を大したものだと思っているのではなく、「恵みとまことを受けるに値しない者です」と自覚している。そのような者が神の一方的な恵みによって、今は二つの宿営を持つまでになりましたと、その恵みの豊かさをあげている。

[11] 「どうか、私の兄エサウの手から私を救い出してください。兄が来て、私を、また子どもたちとともにその母親たちまでも打ちはしないかと、私は恐れています」

ここには彼の率直な願いが表されている。それだけ彼はエサウを恐れていた。もとはと言えば自分がエサウを欺いたことから発したことであったが、一つの罪が何と長い期間にわたって本人を苦しめ、恐れさせるものであるだろうか。人を欺き、だまし、益を得たとしても、必ずその生涯において報いを刈り取らなければならないのである。人はだませても、神はだまされるようなお方ではない。神はすべてを見ておられ、正しいさばきをなされるのである。しかし今、神はそのヤコブの祈りを聞き、あわれもうとして

おられる。

[12]「あなたは、かつて言われました。『わたしは必ずあなたを幸せにし、あなたの子孫を、多くて数えきれない海の砂のようにする』と。」

ヤコブは祈りの最後に再度神の約束のことばを持ち出して神に訴える。私たちが神の約束のことばを握って、「神様、あなたのみことばである聖書にこのように書いてあります。これはあなたの約束です。ですから、どうかそのとおりにしてください」と熱心に祈るならば、神は私たちにとって最善のみこころをなして下さるだろう。私たちは神の約束に訴えて、祈り、願い、求めていくということを十分に学ぶ必要がある。そして、その結果は素晴らしいであろう。

[13-21] ヤコブはこのように主に祈って後、一夜をそこで過ごし、エサウをなだめるための家畜の贈り物を用意する。これもヤコブらしいやり方である。

雌やぎ二百匹、雄やぎ二十四匹、雌羊二百匹、雄羊二十四匹（14）、乳らくだ三十頭とその子、雌牛四十頭、雄牛十頭、雌ろば二十頭、雄ろば十頭（15） 合計五百五十頭とらくだの子である。これは大変な財産である。そして、その一群れずつをしもべたちの手に渡して、群れと群との間に距離をおいて進ませた。（16）また兄エサウがやって来て「あなたは、だれに属する者か。どこへ行くのか。あなたの前のこれらのものは、だれのものか」（17）と尋ねたら、「これらは、あなた様のしもべヤコブのものでございます。ご主人のエサウ様に差し上げる贈り物でございます。ご覧ください。ヤコブもうしろにおります」と答えよと命じる。（18）家畜の群れは九つあるので、エサウは九回、ヤコブのあいさつを聞き、贈り物としての家畜の群れを見るわけである。そうしているうちにエサウの気持ちもほぐれて、やがて彼は私を受け入れてくれるかもしれないと考えたのである。（19～20）

「こうして贈り物は彼より先に渡って行ったが、彼自身は、その夜、宿営にとどまっていた」（21）

ヤコブとしては打つべき手は打ったが、心に平安はなかったであろう。

今日の個所から教えられることは何か。

1. 神は約束を守られるお方である。28：13~15、31：3
2. 神のみ言葉に従う時、祝福が与えられる。32:9~10
3. ヤコブは相変わらず、自分の知恵を働かせるが、それでも神への信頼と謙遜さを身に着けた。これは大きな進歩である。

このようにヤコブを守り、導き、その信仰を成長させられる神は、また、私たちをも守り、導き、祝福して下さるお方なのである。私たちがヤコブと同様、自己中心なところがあり、自分の知恵や力に頼って物事を切り抜けようとする者であるが、そのような自分の力ではどうしようもないところまで追い込まれることが出てくるかもしれない。その時、私たちは自分の愚かさ、罪深さ、無力さに気がついて、神の恵み、あわれみにすがらざるを得なくさせられるのである。しかし、これもまた恵みであり、

そのようにして私たちは神の前に信仰者として整えられ、成長していくのである。神のみことばである聖書には神の豊かな祝福の約束が満ちている。私たちは神のみことばの約束をよく知って、それにより頼んで、神からの豊かな祝福をいただくものになりたい。